

現代ロシアにおけるモスクワ大学 経済学部学生の価値観の変化について

On the Change of Students' Sense of Value in the Faculty of Economics at Moscow State University

齊 藤 久美子

Kumiko SAITO

Abstract

In today's Russia, during the transition to a market economy, students' sense of value is changing. In the faculty of Economics at Moscow State University, named after M.V. Lomonosov, from 1998 to 2001 a group of professors investigated the sense of the students.

In this paper, we analyze students' sense of value, relationships among them, their life plans, and their evaluation of today's Russia.

はじめに

筆者は先に「モスクワ大学経済学部学生の入学動機および勉学態度」⁽¹⁾を表した。そこでは、「高等教育を受ける動機及びモスクワ大学を選択した理由」、「勉学態度」について考察を行った。

さて、本稿ではそれに引き続き、モスクワ大学経済学部の学生観、ここでは、学生環境における心理と友人関係、人生の設計プラン、そして現在のロシアについてどのように評価しているかを考察していきたい。

なお、本稿に関わる調査は2001年春に行われたものを対象としている。調査数、学年別人数は[表1]に示したとおりである。

[表1] 2001年調査数⁽²⁾

	総数	回答数	回答率(%)
合計	1432	386	27
1年次	402	99	25
2年次	340	128	38
3年次	376	66	18
4年次	314	93	30

(1) 齊藤久美子「モスクワ大学経済学部学生の入学動機および勉学態度」和歌山大学経済学部『研究年報』第6号、2002年。

(2) О.И.Лашшева, Э.Н.Фаустова, А.Ш.Ходжаев, Социологический портрет студента Экономического факультета МГУ, Издательский центр Экономического факультета МГУ, 2001, стр.4.

・モスクワ大学経済学部学生の学生環境における心理

[表2]においては、学生自身が学部において友好的に学友と接しているかどうかについてデータを示した。ここでは回答者の40%が経済学部と自分との関係を快く思っている。具体的には彼らは学生間の相互関係がとても友好的であると答えているのである。しかし実際のところ、学年ごとにデータは

[表2] 自分は学部において友好的だ⁽³⁾
(回答に対する割合%)

全体	1年	2年	3年	4年
40%	59%	40%	42%	19%

かなり異なる数字を示しており、4年生になると数字が低くなっている。

それと同時に、個人同士の小さなグループに分かれており、3人から4人からなる小さなグループのなかで緊密な関係が築かれている。さらにまた、4年生になると多くの学生が働いており、そのなかのある者は既に結婚して家庭を築いているために個人的な関係を緊密に築くには限界がある。一般にロシア人は早婚であり、日本の大学生では4年生で結婚しているのはきわめて少数であることに比べれば、特徴的であるといえる。

[表3]を参照されたい。回答者の35%が学部において学友たちと友好的な人間関係は築いていないけれども、グループにおいて関係は正常であると答えている。

[表3] 学部においては友好的とはいえないけれどもグループにおいて関係は正常である⁽⁵⁾
(回答に対する割合%)

全体	1年	2年	3年	4年
35%	25%	40%	34%	37%

すなわち、[表2]に示したアンケートの結果とあわせれば、75%が関係は正常であるといっているのである。しかしながら、これらを総合して考えてみても、学年によって、人間関係が心地いいものだと考えている学生の割合は異なってくるのである。たとえば1年生は84%が快適だと考えている(59%が友好的だと答え、25%が正常だと回答している)のに対し、4年生は56%(19%が友好的と答え、37%が正常だと回答している)しか、人間関係が心地いいものであると考えていないのである。学年が進めば進むほど、集団における人間関係について批判的な評価が増えてくるのである。

回答のなかの選択肢「学生同士の間で疎外を感じる」を選んだものは回答者の24%である。これはすなわち、4人に一人は自分の同級生の間で心地よさを感じていないということになる。⁽⁶⁾[表4]を参照されたい。

(3) Лапшева, Фаустова, Ходжаев, указ. соч., стр.27.

(4) Там же.

(5) Там же.

(6) Лапшева, Фаустова, Ходжаев, указ. соч., стр.28.

[表4]によれば、学年が進めば進むほど、集団の中で疎外感を感じる学生が増加している。これには特別な分析が必要となるであろう。

[表4] 集団の中で疎外感を感じる⁽⁷⁾
(回答に対する割合%)

全体	1年	2年	3年	4年
40%	59%	40%	42%	19%

集団における雰囲気は緊密な個人的関係によって性格づけられる。そこで、困ったときに助けてくれる友人がいるかどうか [表5] がその質問の結果である。⁽⁸⁾

[表5] 親友がいる⁽⁹⁾
(回答に対する割合%)

	全体	1年	2年	3年	4年
はい、います	77%	78%	77%	86%	61%
いいえ、いません	10%	10%	9%	7%	16%
答えない	9%	9%	8%	5%	15%

そこでは10%の回答者（4年生に至っては16%）が親友はいないとはっきりと回答している。そして彼らは人間疎外を強く感じているといえる。彼らは自分たちが孤立していると感じている。それは、しばしばいろんな局面で、家庭であったり、集団であったり、あるいは人波のなかであったりする。そしてそこで、自分を「アウトサイダー」であると感じている。真実、彼らは自分を社会のはみ出しものだと感じ、誰も自分を理解していないと考え、それゆえにだれも困難なときに支えてくれないと感じているのである。⁽¹⁰⁾

ひょっとしたらこれは人生への新しいアプローチが始まったということの副次的な結果なのかもしれない。自分自身だけを信頼する必要性、自立心・独立心の必要性、そして自分の運命に対しては自分だけが責任をもつ必要性に気付いたが故かもしれない。⁽¹¹⁾

ロシアでは、日本に比べて、早婚である。4年生では職業を持つのが普通（アルバイトという意味ではない）というような社会では、それだけ学友に対して、間を置くということもある意味で当然かもしれない。

しかしながら、それは未熟な学生であるからゆえの現象とも言える。なぜなら、社会的な独立性や自立性は人間から疎外されるということではないからである。⁽¹²⁾

それ以外に挙げるべきは、自分の友人に対する信頼の低さである。これは若者たちが、既に真剣に失望を体験した、というだけでなく、さらに人間関係における信頼への期待をまだ、

(7) Лапшьева, Фаустова, Ходжаев, указ.соч.,стр.28.

(8) Там же.

(9) Там же.

(10) Там же.

(11) Там же.

(12) Там же.

捨てきっていないとも言えるのである。4年生の3分の1（親友がいないとはっきり回答した者が16%、何も回答しなかった者が15%）は親友がいないと回答した。すなわち残り3分の2には親友がいるわけである。

友人同士の衝突による危険な雰囲気を感じていない。3年生、4年生にしてもほんのわずかである。数字を挙げれば3年生は1.1%、4年生は1.5%⁽¹³⁾である。

そしてまた、「時々、友人との相互関係に犯罪の危険性を感じる」と答えたのは3年生にも4年生にも0.3%⁽¹⁴⁾ずつというきわめて少ない割合である。

． 1 小 括

以上、モスクワ大学経済学部学生の心理について検討してきた。もちろん、ここでは日本の学生との比較が必要になるであろう。本稿においてはそれが欠落している。

それゆえ、わが国との学生の環境の相違点についてここで補完・紹介しておこう。

まず、モスクワ大学の学生が少年であった1991年12月にソ連邦は崩壊した。幼い頃から、共産主義青年同盟（コムソモール）の前身であったピオネールの一員として、社会主義社会で幼いながらエリート候補生であった学生たちはその後、市場経済の困難のなかで様々な価値観を変動させられるのである。このような困難はわが国の学生にはない。

二つ目は旧ソ連時代から、ロシアの大学生たちは一般に早婚である。学生寮には夫婦寮もあり、若いカップルがベビーカーを押しながら、散歩している姿も頻繁に目にする。こういうことはわが国ではほとんどみかけない。

さらには、ロシアでは、大学4年生ともなれば単なるわが国の学生のアルバイトの域を超えたプロフェッショナルなエコノミストとしての職業を持つ学生も多い。わが国では最近、大学に学生のインターンシップが次第に整えられつつあり、また学生によるベンチャーの起業も話題には上っている。しかし、それはまだごく一部の学生に限られている。

本章では、今後ロシアがどのように進んでいくかを検討するうえで、次代を担う若い世代の意識に関して分析を行った。

． モスクワ大学経済学部学生の卒業後の人生設計プラン

モスクワ大学経済学部の学生たちは経済学教育を受けることに、卒業後の自分自身の問題として、大きな期待を寄せている。ここでは、1998年の調査とともに、比較していく。1998年の調査の標本数は327名である。

モスクワ大学経済学部では多数のレベルの教育システムに移行した。卒業証書は教育のさまざまなレベルにおいて受け取ることができる。どんな卒業証書を学部の卒業生たちが受け

(13) Лапшьева, Фаустова, Ходжаев, указ. соч., стр.29.

(14) Там же.

取ることができるかということは(学士または修士)、その専門に応じてさまざまである。ロシアの大学では経済学部経済学科卒業というような卒業証書ではなく、具体的に何を専攻したか記載される。たとえば「金融論」や「統計学・会計学」というのがその一例である。回答者のうちの大多数(86%)の学生が、学士の卒業証書を授与された後も大学での教育を継続させたいと考えている。わずかに12%の回答者だけが学士のプログラムだけでよいと考えている。回答者の大部分(65%)は自分の教育を修士の修了証書を受け取ることによって完了させたいと考えている。これは具体的には1年生では64%、2年生では71%、3年生では65%、4年生では58%である⁽¹⁵⁾。これらを見ていくとわかるように、4年生で若干ポイントを下げている。これは学士としての卒業が近づいているからであろう。ただ、全体として日本に比して修士への進学の希望が高いのは、ロシアで最高学府のモスクワ大学であるというだけでなく、修士卒業がかえって就職への妨げになるといわれているわが国とは事情が異なるからである。

実際問題として、5人に一人が大学院での教育の継続を望んでいる⁽¹⁶⁾。[表9]を参照されたい。ここでいう大学院とは日本の大学院博士後期課程にあたるものである。この博士後期課程に進みたい者は高学年になればなるほど、割合は増加している。大学教育のあり方に対する批判が、日本と同様、高まっているロシアにおいても、2001年のモスクワ大学経済学部では多くの学士卒業者がさらに教育の継続を望んでいることは評価されよう。

「大学を卒業後、何をやりたいか」と学生に問いかける場合、特に制限を設けず、いくつかの回答のバリエーションを許すほうがよい。そこで調査者らはいくつかのバリエーションを考えたようである。

まず、二人に一人の学生が大学卒業後(学士または修士課程修了後)、専門に従った仕事をするつもりであると回答している。[表6]を参照されたい。1998年と比較すると数字は少し減少している。学年によって相違はあるものの市場経済化の進展によって、専門以外で自分の能力を活かすチャンスがあると考えてもよいという傾向を窺い知ることができる。

[表6] 専門に応じた仕事をするつもりである⁽¹⁷⁾
(年度ごとに回答者に対する割合%)

全 体		1 年		2 年		3 年		4 年	
1998	2001	1998	2001	1998	2001	1998	2001	1998	2001
57.8	50.5	53.5	43.4	63.5	50.0	59.1	62.1	52.2	50.5

次に高給な仕事を探したいとしている学生の割合が増加している。[表7]を参照されたい。特に、卒業間近の4年生に関してみれば、35.8%から63.4%へとおよそ2倍に増加して

(15) Лапшѐва, Фаустова, Ходжаев, указ. соч., стр.29.

(16) Там же.

(17) Лапшѐва, Фаустова, Ходжаев, указ. соч., стр.30.

[表7] 高給な仕事を探したい⁽¹⁸⁾
(年度ごとに回答者に対する割合%)

全 体		1 年		2 年		3 年		4 年	
1998	2001	1998	2001	1998	2001	1998	2001	1998	2001
40.7	44.6	33.8	42.4	39.6	35.2	50.5	39.4	35.8	63.4

いる。これはやはり、1998年のデフォルトを経た市場経済化の影響であろう。

また、卒業後、外国へ出て行きたいとする学生の割合も増加している。[表8]を参照されたい。これは高等教育を受けた卒業生の目標が変化していることを証明している。1998年には11.3%の1年生が外国へ出て行きたいとしたのに、2001年には22.2%へと増加している。さらに分析すれば、2001年には4年生になっている1998年に1年生だった学生は、入学当初は11.3%が卒業後、外国へ行きたいとしていたのに対して、2001年の最終学年ではその2倍の22.6%が外国へ行きたいとしているのである。また、4年生の間で比較してみると1998年には4年生のわずか4.5%が卒業後、外国へ出て行きたいとしていたのに対し、2001年にはそれが22.6%に増加している。実に5倍もの増加である。

[表8] 外国へ出て行きたい⁽¹⁹⁾
(年度ごとに回答者に対する割合%)

全 体		1 年		2 年		3 年		4 年	
1998	2001	1998	2001	1998	2001	1998	2001	1998	2001
8.0	20.5	11.3	22.2	8.3	22.7	7.5	10.6	4.5	22.6

そして18.4%の回答者が経済学教育を受けるだけでは不十分であると考え、彼らは経済学部での勉学を終えた後、別の二つ目の専門を必要とすると考えている。特に1年生でのその傾向が強く、回答者の26.3%が二つ目の専門が必要であるとしている。1998年にはこれに対しては全体で11.6%の回答者が必要と答えただけであった⁽²⁰⁾。

さて、大学院博士後期課程へ進学したいとする学生は全体では1998年には20.2%であるのに対し、2001年には16.3%に減少している。[表9]を参照されたい。特に4年生では半減し

[表9] 大学院（博士後期課程）に進学したい⁽²¹⁾
(年度ごとに回答者に対する割合%)

全 体		1 年		2 年		3 年		4 年	
1998	2001	1998	2001	1998	2001	1998	2001	1998	2001
20.2	16.3	18.0	15.2	14.6	11.7	15.0	21.2	37.7	20.4

(18) Лапшьева, Фаустова, Ходжаев, указ. соч., стр.30.

(19) Лапшьева, Фаустова, Ходжаев, указ. соч., стр.31.

(20) Там же.

(21) Там же.

ている。これは学問に対する価値が市場経済化のなかで下がってきていることを表しているのではないかと筆者は考える。

もちろん、調査者たちは「モスクワ大学卒業後、何をしているかわからない」とか「状況に流されて生きるだろう」というような回答にも出会っている⁽²²⁾。しかし、全体としてモスクワ大学経済学部の卒業生は専門に応じて働いて高給を得たいと考えている。

1 小 括

以上、モスクワ大学経済学部卒業後の学生の人生設計プランを検討してきた。日本や他国の学生との比較も必要であるが、ここではそれが欠落している。

そこで、筆者はロシアの学生が抱える問題の特殊性をここで補完、紹介しておきたい。繰り返しを恐れずにロシアの市場経済化の特徴を概括しておこう。それは、1) 1991年末にソ連邦が崩壊し、市場経済化の過程にロシアがあるということ、さらに2) 1998年夏には国債の償還ができなくなり、デフォルトを引き起こしたこと、それが、3) ロシア人の学生のみならず、ロシア人全体の価値観を大きく変えたということである。

誤解を恐れずに記せば、ロシアでは拝金主義が蔓延している。これも致し方ないであろう。社会主義社会において個人の欲求は社会の欲求へ止揚されることなく、抑圧されたに過ぎなかったのである。

このような社会主義から市場経済への移行の過程において、その頃に少年期・青年期といった多感な時期を過ごしているモスクワ大学経済学部の学生たちが高給で専門に応じた仕事を求めるのは、ある意味で当然である。そしてだからといって彼らを批判することもないと考えられる。というのは、向学心にあふれている限り、何かを生み出していくエネルギーになるからである。

今後、彼らがどのように個人として生き、そして社会を形成していくのか見守る必要があるだろう。

1. モスクワ大学経済学部学生によるロシアの改革への評価

さて、モスクワ大学経済学部学生によるロシアの発展へのロシアの改革への評価である。[表10]を参照されたい。

1998年には全体の40パーセントがロシアは正しい方向へ進んでいると回答し25パーセントは間違った方向に進んでいると回答していた。すなわち、正しい方向と答えたものが多かったことになる。ところが、2001年になると、ロシアが正しい方向に進んでいると回答した者と間違った方向に進んでいると回答した者がほぼ同数の30.6パーセント、30パーセント

(22) Лапшѐва, Фаустова, Ходжаев, указ. соч., стр.31.

[表 10] ロシアの発展への評価⁽²³⁾ (%)

回 答	全 体		1 年		2 年		3 年		4 年	
	1998	2001	1998	2001	1998	2001	1998	2001	1998	2001
正しい方向	40	30.6	34	32	44	28	37	38	44	27
間違った方向	25	30	24	32	23	31	28	20	28	33
答えるのは困難	35	36	41	37	33	37	34	38	24	37

とそれぞれなっている。回答が困難であるとした者は1998年、2001年それぞれ35パーセント、36パーセントであり、ほぼ同じ割合となる。

この[表10]によればロシアの発展の方向が「正しい」と回答した者が減少し、「間違っただ方向」へ行っていると回答した者が著しく増加していることになる。

しかし、ここで若者たちが「間違っただ方向」というのは、具体的に何をさしているのだろうか。というのも、「間違っただ方向」とはさまざまであるからだ。「間違っただ方向」にしても、現在、行われているロシアの改革の内容なのか、改革が行われている方法のことなのか、改革の行われるテンポなのか、それとも社会改革の必要性をすべて否定してしまっているのか、それがここでは、分からない。けれどもいずれにせよ、ロシアで行われている改革に対して、批判的な経済学部の学生の割合は、1998年では四分の一、2001年では三分の一にのぼっているのである。

1998年には4年生の多くが「正しい方向」と考えており、回答を困難とする者は少なかった。これは上級生になってくると経験豊かになって、自分の立場を下級生に比べてよりはっきり表現することができるようになるからかもしれないが、2001年のデータを見ると1年生も4年生も変わらない。

若者の多くが、ロシアで行われている改革に批判的な傾向をより強く持つようになったということが、明確にいえる。そして、自分の立場を表すことができない学生も増えている。ただ、「正しい方向」という学生は減少しており、変化している社会において信じていることができない方向と自分の将来性への困難を心配する学生が増えているのである。

1 小 括

以上、モスクワ大学経済学部学生のロシアの発展の方向に対する評価を検討してきた。1991年末にソ連邦が崩壊し、市場経済化の過程にロシアがあるということ、さらに1998年夏には国債の償還ができなくなり、デフォルトを引き起こしたこと、それが、ロシア人の学生のみならず、ロシア人全体の価値観をゆるがせている。

このような社会主義から市場経済への移行の過程において、その頃に少年期・青年期と

(23) Лапшѐва, Фаустова, Ходжаев, указ. соч., стр.32.

いった多感な時期を過ごしているモスクワ大学経済学部の学生たちの多くが将来の不安を訴えていること、これが今後、ロシアの改革にどのように影響していくであろうか。大いに関心のあるところである。

・ む す び

以上、ロシアのモスクワ大学経済学部学生の学生環境における心理と友人関係、人生の設計プラン、そして現在のロシアについてどのように評価しているかを考察してきた。調査後、3年が過ぎているが、たとえば、外国に行きたいというような希望は増えていると考えられる。

しかし、チェチェンのテロなどによる社会不安は経済成長とともに比例して、増大している。今後、このような比較調査を続けていく必要が迫られている。